別紙２　　令和５年度　　自己評価書　　作成日：９月８日　国分寺市立第一中学校　　校長名　榎本　圭志

教育目標：　(1) 自ら考え判断し行動できる人になろう　(2) 思いやりのある心豊かな人になろう　(3) 心身ともに健康でたくましい人になろう

目指す学校像：「輝く未来を創造」し、国際社会に進んで貢献できる生徒が育つ学校…　○思いやりのある「豊かな心」を育み、安心して活動できる学校　○個性や能力を生かし、「確かな学力」を育むことができる学校　○心身ともに健康で、たくましく生きる力を育むことのできる学校

目指す生徒像：個性と創造力豊かな生徒…　○互いを尊重できる人間性豊かな生徒　○自ら進んで自己実現に向けて学び続けようとする生徒　○心身ともに健康で、生きがいを持ち自立できる生徒

目指す教師像：○共感する姿勢をもち生徒の健全育成に主体的に取り組むことのできる教師　○創意ある教育活動の推進に意欲的に取り組むことのできる教師　○高い人権意識感覚を持ち、自ら範となり伝えることのできる教師

領域	中期目標	短期目標	具体的方策	努力指標（中間）	努力指標（最終）	成果指標（中間）	成果指標（最終）	分析コメント	改善策
豊かな心の醸成	人権尊重の理念を基調とした教育を推進し、互いに認め合い、思いやりのある豊かな心を育む。	生徒主体の学校行事等を通し、学級居心地感を高め自己肯定感を育て、いじめの根絶と不登校生徒の減少に努める。	自己肯定感の育成に努め、居心地の良い学級づくりを行う。安心した集団生活を送れるよう、毎学期アセスメントを行い、結果を指導に活かす。	2		4		①９割以上の生徒が学級を居心地のよい場所であると感じている。一方約８％の生徒の居場所がない可能性があると読み取れる。 ②教員の努力指標で、肯定的な回答が６８％、生徒の成果指標が９２％と、努力指標が低い数値であるが、成果指標から学校に生徒の居場所がほぼ確保できていると読み取れる。 ③教員間でアセスの結果活用法について、理解度に差があることもわかってきた。	①アセスを分析し、居心地の悪さを感じている生徒に対して、個別に面談や対策を講じる。【アセスの活用】 ②次回のアセス調査での変容を注視し、早期対応に備えていく。 ③アセスの活用方法に係る校内研修を行い、各教員の理解度と有効な活用方法について研鑽を深める。【アセスを活用できている教員による活用事例紹介等】
			学校いじめ防止基本方針に基づく対応を徹底し、いじめの根絶を目指す。不登校生徒削減に向け、SCやSSWの協力を得ながら、生徒に寄り添った教育相談活動を進める。	4		3		①「いじめ」への対応について、教員の努力指標の肯定的回答１００％、生徒による成果指標８８％であることから、教員が思うほど生徒が感じる学校のいじめへの対応への評価が高くないと読み取れる。 ②校長が示す基本方針の下、分掌間やＳＣ、ＳＳＷ、サポート教室等で連携を図り、組織的な対応は行われているが、更に改善は必要である。	①いじめ防止に関する生徒の実態把握の手段の見直しを含む、教員の意識や対策の適正を議論する場を設ける。 ②今後も分掌部会や校内委員会を基本として、緊密な報告・連絡・相談を行い、組織的対応を継続する。 ③研修等を通して「学校いじめ防止基本方針」の内容について、今後も教職員で理解を深め、方針を徹底させていく。
			「特別な教科　道徳」の内容や指導法を工夫・改善し、「考える道徳」「議論する道徳」の推進し、適切な評価を実現させる。	3		4		①「特別な教科　道徳」の授業で、教員の努力指標の肯定的回答７９％、生徒による成果指標９３％であり、授業では生徒が主体的に考え、議論に参加出ていることが読み取れる。 ②生徒は道徳の授業に肯定的な印象を持っているが、教員の回答から、まだ授業改善の必要性を感じている教員がいると読み取れる。 ③取扱題材や生徒の反応等により改善の余地があると捉えている教員もいる。	①年間を通じて考える道徳、議論する道徳を継続させる。 ②働き方を見直し、教材研究や研修会の時間を確保する。 ③道徳教育推進教師を中心に意図的・計画的に議論する場面を設定した指導計画の立案と授業実践を行う。
確かな学力の定着	個性や能力を生かすわかる授業、興味・関心のわく授業の実現に努め、確かな学力の定着を図る。	各教科、領域等で言語活動を充実させ、主体的・対話的で深い学びの充実を図り、生徒の思考力、判断力、表現力を育成する。	授業における言語活動の推進・充実に努め、習得・活用・探究という学習活動の在り方を研究し、日常の授業改善につなげる。	2		4		①授業での発表・討論等に関して、教員の努力指標７９％、生徒の成果指標９９％であった。 ②生徒は習得した力を活用・探究する授業が実践されていると感じているが、教員の回答からは、まだ授業改善の余地があると考えていることが伺える。 ③単元や授業内容、授業進度により、発表や討論の場を設けることが難しいことも考えられる。	①年間を通じて協働的な活動を活用した個別最適な授業を継続させる。 ②働き方を見直し、教材研究や研修会の時間を確保する。 ③研修担当を中心に、ＩＣＴの活用を推進しながら、多様な形態による発表、討論が行われる指導方法について模索する。 ④互いの授業を参観し合い、発表・討論等が活発な授業づくりについて学ぶ。
			GIGAスクール構想によるタブレット端末の活用を更に進め、学習の個別最適化、協働的な学習を推進し、「できた!」「わかった!」が実感できるようにさせる。	1		3		①ＧＩＧＡ端末の効果的な活用に関して、教員の努力指標６８％、生徒による成果指標８７％であることから、生徒はＧＩＧＡ端末等を利用して授業が分かりやすいと感じていても、教員はＧＩＧＡ端末は使いつつも効果的な場面であったかどうか疑問を持っていると読み取れる。 ②全国学力・学習状況調査の結果からも一中授業でのＧＩＧＡ端末利用率が高い結果だったが、今後は効果的な場面での利用にシフトしていく必要がある。 ③日頃のＧＩＧＡ端末の効果的場面での使用について、教員間の差もある。	①ＧＩＧＡ端末の活用実績を増やすことから、本当にＧＩＧＡ端末が効果を上げる場面はどのような場面なのかを教科ごとにまとめる。 ②活用時の使いにくさや不具合等を生徒からも聞き取り、指導者・学習者の両面から問題点について実態把握を行う。 ③研修担当とＧＩＧＡ担当が連携し、教科横断的に効果的なＧＩＧＡ端末の使用事例について紹介する時間を設ける。
			放課後、長期休業を利用しての補習教室等の開催により、学習の遅れがちな生徒の学びの基礎作りに努める。	―		4		①授業での質問のしやすさに関して、生徒の成果指標で肯定的回答は８１％と高いが、否定的回答も１９％であり、約５分の１の生徒が質問しにくいと感じていることについて改善していかねばならない。	①生徒から、授業で質問がしにくいという状況や原因について聞き取りをするなどして、分析し改善を学校として考える。 ②休み時間や放課後の時間を活用し、生徒が自由に質問できる場づくりに努める。
健やかな体の育成	体力・運動能力の向上を図り、生涯を通じて健康・安全で活力ある生活が送れる力を育てる。	基本的な生活習慣と結び付けた運動の日常化を推進する。	保健体育の授業や運動部活動を通し、日常生活での意識啓発を行い、生徒の体力・運動能力の回復・向上に努める。	1		3		①体育科教員は平均して２７．５回の授業で、生徒の体力向上・運動能力の回復・向上に向けた授業をしているという結果が出た。 ②８８％の生徒が体力向上・運動能力の回復・向上に努めて生活しているという結果が出た。 ③年度初めのオリエンテーションや運動会に向けた活動等で、体力向上に特化した取組の実施が難しかったとも考えらるが、体育科の教員間の取組みにも差がある。	①保健体育科の授業や学校生活全般、学校行事、部活動を活用し、生徒が自分事として体力向上や健康的な生活に取り組めるよう指導を実践する。 ②働き方を見直し、効果的な指導法の研究・開発の時間を確保する。 ③保健体育科の２学期以降の単元指導計画の中で、毎時間継続的に体力に資する活動を授業改善推進プランに位置付けるなどして実践していく。
輝く未来の創造	持続可能な社会に向け、開かれた学校づくりや愛校心や郷土愛を育み、所属感・連帯感を養うことで地域との連携や、生徒の社会貢献への意識を高める。	自校及び校区を中心にＥＳＤ（ＳＤＧｓ）を推進する。 保護者や地域と連携した多様な教育活動を行い、進んで社会に貢献できる力と態度を育てる。	教育課程に職場訪問など地域連携を位置づけるとともに、生徒の地域事業への積極的な参加を呼びかけ、ボランティア活動への社会貢献の意識高揚を図る。	―		―			
			開かれた学校として、地域教育力を積極的に取り入れ、保護者や地域へ、ブログ等を活用し、教育活動理解に向け、積極的に情報を発信する。	―		4		①保護者の成果指標で９６％が肯定的な回答を示した。 ②スクリレを活用した情報発信も定着してきたからと考えらる。	①保護者との協同的な連携を図る。また、コロナの蔓延により途絶えた地域との関係について、地域との連携の機会を積極的に作ったり、地域への学校だよりの配布を拡大させ、地域に開かれた学校づくりへと発展させる。 ②引き続きスクリレの活用を継続し、保護者が時と場所を選ばず必要な情報を個人の端末を通して入手できる環境を整える。